

## コロナ禍の組合運動に思う

さかねもとひこ  
坂根 元彦

●日本郵政グループ労働組合（JP労組）・労働政策局次長

新型コロナウイルス感染症は、昨年1月に国内初の感染が確認されて以降、各国でワクチン開発がされているが、いまだに感染拡大が収まらない状況にある。

政府は今年1月7日に、2回目の緊急事態宣言を発令し、飲食店への営業時間短縮要請や不要不急の外出自粛、テレワークの推進などを要請し、感染防止の取り組みを強化している。

各企業でも、昨年1回目の緊急事態宣言等が出されたことを受けて、徐々に在宅勤務が広がってきており、これまで対面で行ってきた会議についても感染拡大を防止するために、リモート会議が多くなってきているようだ。

このリモート会議は、新型コロナウイルス感染症が拡大するまでは、会議時間を短縮させるために使ったり、社員から情報をリアルタイムに集約するためなど、一部の会社で行うものだろうと漠然と思っていたが、身近なものになりつつある。

私もリモート会議が増えたが、通常の会議と変わらないように相手との意思疎通はできているとは思っているものの、会議中に多少のシステムの不具合が起こることがあり、いまだに慣れていない。

何より、リモート会議を経験された方は分かると思うが、通常の対面で行う会議とリモート会議を比べると違和感を覚える方も多いと思う。

それを文字で説明するのが難しいが、感覚的に何か足りないと感じることはないだろうか。

それは、おそらく通常の会議の対話で、相手の温度感や想いなどを無意識に感じ取っていたが、リモート会議ではそれが感じ取れないので、それが妙な感覚をもたらしていると思う。

少し話が逸れるが、最近では若者を中心にカセットテープやレコードで音楽を楽しむ人が増えているという。

それは、CD（コンパクトディスク）の音のように、ノイズもなく鮮明に聞くことができる音楽もいいが、一方で、ひと昔前のカセットデッキやレコードプレーヤーから発するゴソゴソと多少のノイズも、「独特な味がある」とか「温かみのある音」と新たな魅力になっているようだ。

調べてみると、CDの音はデータ量等に制限があるため、実際の録音現場で出ている一部の音をカットしているが、レコードは幅広い帯域の音が刻まれているので、原音に近い感覚で聞くことができるようだ。

コロナ禍により、労働組合の活動も自粛を余儀なくされる部分もあるが、これまで培ってきたFace to Faceといったリアルとデジタルを融合し、あらゆる手段を駆使しながら、労働組合として組織の活性化をはかり、より充実した活動を増やしていくことが重要ではないかと思う。